

「小さいうちに」は誤り

ほくりく

医療
最新線

昨年五月から石川県内に広まった流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）が、いまだ収まりを見せない。具感染症発生動向調査によると、一昨年は週一けた台で推移した患者数が、昨年末には三百人に迫る数となり全国最多を記録した。今年の明

「麻疹の予防接種はできれば2回がよい」と言う渡部院長—金沢市泉本町5丁目



度しかかからず、「小さいうちにかかっていた方がいい」といわれる病気がある。麻疹がそうだ。大人になると症状がひどくなることもあるため、しばしばそういわれるが、小児感染症の情報収集を進めているわたなべ小児科医院（金沢市）の

より動向調査では発症数は少ない。しかし、渡部院長は「発症数が少ないことが逆に「落とし穴」になる可能性を秘めている」と警告



石川県内で猛威を振るっているおたふくかぜで、医療機関も積極的に予防接種をするよう、親に促した—昨年10月、石川郡内

けに百四十四人と一度落ち込んだものの、翌週には二百四十五人に跳ね上がり、予断を許さない状況が続いている。

流行性耳下腺炎は髄膜炎や難聴、不妊症につながる恐れのあるこう丸炎、卵巣炎を引き起こすことがあるが、炎症そのものが生死をおびやかす病気ではない。その点、昨春に羽咋郡市で患者数が急増した麻疹、一般にいうのはしは違ふ。

接種は満一歳で早々に

渡部二院長は「それは予防接種が確立しなかったこと

のこと。かかっていたとはいかない病気」と話す。麻疹は三十九〜四十度の高熱が一週間前後続くが、最初は通常の風邪と区別がでない。発疹が現れるのは三、四日目である。時に脳炎を伴い、患者千〜千五百人に一人の割合で死者を出す恐ろしいものだ。現在、石川県内の定点医療機関に

後進国」といわれてもおかしくない」と言い切る。

は生まれた時点で母親から麻疹ウイルスに対する抗体が与えられている。この力は一年もしないうちに消えるため予防接種が必要で、日本小児科医学会では満一歳を迎えたら早々の接種を勧めている。しかし、抗体は麻疹ウイルスがやっつけてきた。日本は支援の約束を取り交わしたが、国内ではまだ公費でまかなわれない。予防接種が一回に過ぎないというのは、なんとも皮肉な話ではないか。

予防接種は公費でまかなわれるため、麻疹は他の感染症に比べ、接種率は比較的高い。石川でも83%（九九年）とそこそこの値をはじき出しているが、これはあくまで日本での話。90%を超える率で麻疹ワクチンを二回接種するアメリカでは年間に百数十人程度の患者しか出していない。渡部院長は「年間三十五万人が患うとされる日本が、麻疹

日本は「後進国」

はしか

高熱続き死者も

たいていの人が一生に一